



発行日 2019年 1月7日 52号
 発行 相原まちづくり協議会
 責任者 理事長 土田 恭義
 所在地 町田市相原町 597-56
 電話 042 (774) 2982

相原まちづくり協議会

検索

東京都へ町田街道整備促進に関する要望書提出



平成30年11月26日、東京都第1本庁舎におきまして、相原まちづくり協議会平成30年度重点活動項目のひとつ『町田街道整備促進に関する要望書』を、相原地区連合町内会横溝文雄会長代行、北島卓美副会長とともに東京都に提出いたしました。

長谷川明副知事をはじめ奥山道路建設部長、荒井都市基盤部長以下東京都職員、計8名、そして今回の都訪問に際し多大なご尽力を頂いた吉原修、小磯善彦、奥澤高広の3名の都議会議員、佐藤伸一郎、小関重太郎、斉藤勝広の3名の町田市議会議員の方々にもご同席頂き、相原地域の積年の熱い思いを伝えてまいりました。

具体的な要望事項は以下の通りです。

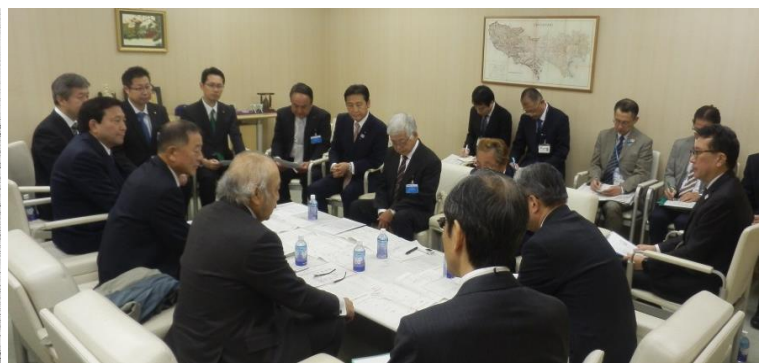
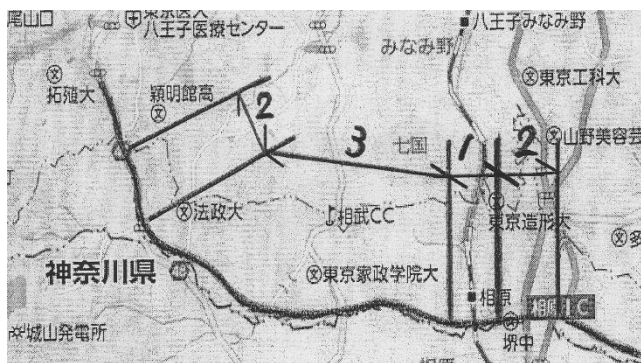
1. 現在、都市計画事業決定がなされ、用地買収が進められている大戸踏切の立体化事業に対して早期

の工事着手と整備完了時期の確定を要望する。

2. 旧国道16号の相原交差点から仲町の中央橋までと大戸交差点から八王子市の館町清掃工場入口交差点までについて都市計画決定はされているが事業決定はしていない。この2区間についても早期に事業決定を行い、整備について推進し、大戸踏切立体化事業と連続して同時期に完成させる。

3. きらぼし銀行交差点より大戸交差点までの区間については都市計画決定を行い、相原地区の町田街道全線の高規格化の道路としての整備を図るよう推進していく、道路行政は非常に時間を要する難題ですが、今後とも粘り強く取り組んで参りたいと思います。

相原まちづくり協議会理事長 土田恭義
 担当理事 道満茂雄



相原まちづくり協議会は、11町会 自治会から推薦された理事・監査で運営されています

第21回まちづくり講演会 明治・大正・昭和の相原



2018年11月25日、堺市民センター2階ホールで行われた今回の講演会は、前回の明治・大正・昭和の相原、の第二回目として開催しました。開催日時が日曜日の18時30分からと足を運びにくい時間にもかかわらず80名以上の方にご来場頂きました。今回お話し頂いた内容の一部ですが、ご紹介いたします。

丸山開田 石井 悟氏
青木家の足跡 青木 仁氏
八木重吉の世界 保坂 健次氏
相原の民話 黒田 広子氏

丸山開田 語り部 石井悟氏

開田は、今から65年ほど前になります。開田のリーダーは、塩沢与助さんで他に中村町会の方など24名が参加しました。

相原地区は、田んぼが少なく主に5か所ほどしかなく、お米は陸稲(おかぼ)と言う畑で作る米で水田の米と比べると味はあまり良くありませんでした。

昭和28年にスタートした開田は、29年に測量を開始、中相原の馬込(東京家政学院大学付近)から3470mの水路を引き、昭和30年5月には、およそ4町歩(約200m四方分)の畑に水を引き水田を作ることができました。



しかし昭和35年に相武カントリーができて、水源の水が少なくなり、馬込の水を分けてもらうことが出来なくなり、仕方なく境川にポンプを据えて(中相原のガソリンスタンド付近)途中のヒューム管に境川の水を流しました。しかしその頃は社会環境の急激な変化で境川の水も生活排水等で汚れが徐々に進み、開田から約10年で、水田を諦め畑に戻し酪農を始め飼料などを作る農家が多くなりました。それが前年の講演会で北島一夫氏が話題とした相原酪農銀座です。

開田の碑の場所は旧丸山公会堂から移動して現在の丸山公会堂にあります。碑の裏には、総工費などの記録が詳しく刻んであります。



写真左と中央は、中村公会堂前と相原駅に向かう新しい道路付近で、当時のままの水路が現在もあります。左の写真は、相原小学校裏の道沿いの畑です。埋めたヒューム管と同じ物がそのまま残っています

相原まちづくり協議会は、11町会 自治会から推薦された理事・監査で運営されています

青木家の足跡・回春堂ほか医業の人々・語り部 青木 仁氏

青木 易直 (ヤスナオ)

易直は、寛政9年(1797)の生まれですので、建部家が知行し始めた元禄の頃は、易直の先祖が知行地管理を補佐していたものと考えられます。これは、易直が青木一族のお墓に 妙法(ミョウホウ)蓮華(レンゲ)経一部書写碑を建立し、その碑に「祖父 源兵衛が家を興し、父 勘治郎は之を潤沢にした。

祖父、父を経て益々盛になり(盛んになった)」と記しています。そして、祖父 源兵衛を「中興の祖」と呼び尊敬していました。歴代の信用が積み重なり、易直の代になってもその信用は厚く知行地管理の補佐を続けていました。

また、易直は 建築に精通し造詣が深かったため、建部家が小普請組だったことも影響があるとは思いますが、芝 増上寺に隣接する曹洞宗 青松寺(ソウショウジ)の山門の建築に関わりました。その後、清水寺(セイスイジ)の本堂・観音堂などや 長福寺の本堂・文殊堂・山門などの建築にたずさわることとなります。易直は、文政年間(1818~1830)の終わり頃、十一代将軍 徳川家斉(イエナリ)の治世に大奥の御中臈(オチュウロウ)を務めていた「禅眞院(ゼンシンイン)」と侍女の「妙光院(ミョウコウイン)」を相原に迎えています。その後、易直は、清水寺の本堂と観音堂を再建し、禅眞院が堂主を務めました。禅眞院は、家斉までの徳川家代々の将軍の位牌を回向し、朝に夕に読経の音が響いていたと伝わっています。寺の過去帳の記録には、「禅眞院と妙光院は、江戸本郷お茶の水 建部六右衛門息女下相原 勘次郎宅に※卒(ソツ)ス」と記されており、旗本 建部家のお姫様で姉妹であること、勘次郎(易直のことですが) 宅で亡

くなったとなつています。大奥からの宿下がりと云え、旗本のお姫様が、このような草深い地へ

来ること、これも建部家からの「信の厚さ」が伺えるものと思います。※「卒す」：四位、五位の人の死易直のことは、まだ他にもあるのですが、青木家の先祖から易直まで続く建部家との関係そして、妙法蓮華経一部書写碑には「祖父の冥福を贅え、六親九族(ロクシンキュウゾク)の亡くなった者が苦から離れ、生きている者が長命を楽しむには、三宝(仏法僧)に帰依して、人材を育て 善根を施

すならば、連綿として永い間栄えることは疑いない。」と記されており、遺訓の一つとされている。

これらが、江戸時代は草深く人口も少ない相原に優秀な人材を迎えることができた要因だと考えるところです。



禅眞院と妙光院の墓

青木 得庵

得庵は、文化3年(1806) 本田家に生まれ、勘治郎の娘 喜代と結婚し、養子となります。易直とは、兄弟ということになります。得庵の実父は 本田孫三郎で、本田家は、現在、国立市谷保にあります。得庵は、本田家分家の本田覺庵(ガクアンアン)に師事し学びました。結婚後は、相原 森の下に開業し、江戸時代は、人々の驚異であった天然痘

撲滅のため痘そうワクチン接種を提唱し、実践してきました。「相原 森の下」ですが、私も場所がわからず母に聞いたところ「昔、相原駅の 西側に薬師様(薬師堂のこと)があって、その辺りを森の下という」とのことでした。弘化2年(1845) 得庵は、種痘を開始します。この当時 牛痘苗はなく、人痘苗だと推測されます。

その後、長子の玄礼を介し、伊藤玄朴から牛痘苗(ギユウトウビョウ)接種術及び牛痘痂(ギユウトウカ)を入手し、嘉永4年(1851)に5歳の三男 桃吉に接種し試しました。※「牛痘痂」の「痂」とは「カサブタ」のことです。その後、武蔵の南多摩郡、西多摩郡、北多摩郡(東京都三多摩全域)と相模の高座郡(座間・厚木等の県央地区から相模原)、津久井郡、愛甲郡までという相当に広い地域を接種して回ったようです。青木家が得庵を養子に迎えることができたのは、易直の人脈と人材育成という熱意、その熱意からの奔走(ホンソウ)があったと思います。しかし、得庵が牛痘種を接種して回れたのかの疑問があります。牛痘法の歴史を簡単に言いますと、牛痘法は、嘉永2年(1849)長崎で実施され、同年中には、京都や大阪の緒方洪庵の適塾、そして越前へ広まり、嘉永3年(1850)には富山藩まで広まったと言われていますが、伊藤玄朴等が 神田お玉が池に江戸種痘所を開設したのが、安政5年(1858)です。藩医や緒方洪庵のような有名な蘭方医でない、村の漢方医が嘉永4年(1851)から牛痘法を実践できたのか……その答えは、得庵の長子 玄礼にあると考えます。玄礼は、伊藤玄朴が江戸に開いた蘭学塾「象先堂



(シヨウセンドウ)」の門下生となります。当時、象先堂には藩医等の子弟しか入れないと言われていましたから、易直が禅眞院や建部家へお願いし、禅眞院や建部家からは伊藤玄朴への口添えや後押しがあったものと推察されます。入門すると、伊藤玄朴にその才能や熱心さが認められ、玄朴

の一字をもらって 玄礼の名を与えられます。玄礼から、得庵の種痘への熱意を聞いた伊藤玄朴は、嘉永4年(1851) 得庵に牛痘法の接種術とワクチンを渡しました。玄礼については、その後を期待されていましたが、嘉永6年(1853)に25歳の若さでこの世を去りました。

なお、得庵の妻 喜代は、明治25年(1892)清水寺境内に「善寧児(ジェンナー)先生碑」を建立しています。碑の裏面には「青木得庵種痘普及為記念」とあり、その功績を讃えています。

青木 芳齋

芳齋は、天保3年(1832) 日野の湯浅家の長男に生まれ得庵の娘 ヤス(安子)と結婚し、得庵の養子となります。父は、湯浅弥平で、湯浅家は甲斐武田氏の家臣であった家柄だそうです。明治22年(1889)5月20日付けの青木芳齋の履歴書には、「弘化元年(1844)1月から嘉永5年(1852)8月までの8年8ヶ月の間、八王子の秋山義方(義庵)に漢学及び漢方医学を学び、嘉永5年9月(1852)から安政5年(1858)9月までの6年1ヶ月の間、大阪の緒方洪庵の適塾において、内外科医術及び洋学を学んだ」と記載されています。適塾には、慶應義塾大学の創設者、教育者として有名な、福沢諭吉(天保5年(1834)生まれ)が、安政2年(1855) 適塾に入門、一度退塾しましたが、安政3年に再入門しています。そして、安政4年(1857) 適塾の塾頭になりました。適塾の塾頭は、10人程度いたそうですが、24歳 20歳代で塾頭になったのは、福沢ただ一人だそうです。芳齋は、嘉永5年9月(1852)から安政5年9月(1858)まで、適塾にいましたので、福沢諭吉と同窓ということになり、一緒に勉学したこととなります。そして、相原坂下に回春堂を創設します。芳齋は、相原森の下に開業していた 父 得庵とともに 種痘の接種に努めました。回春堂は、「貧

富、貴賤の差なく診察したので極めて評判が良く遠方から患者が来た」と伝わっています。芳齋は、明治22年(1889)6月14日から明治6年(1893)4月11日まで、堺村の初代村長となります。堺村誌には、「明治2



2年 小山村と相原村は合併し、堺村として生まれ変わった。村の自治行政の骨格も整備され、村役場としての基盤も内容も急速に準備が進み、自治体として正式な発足をみた。」との記載があります。また、安政4年(1857)から安政5年(1858)にかけて、八王子千人同人の家系である秋山佐蔵と金属活字を鋳造し、オランダ語の辞書「クストウォーデンブーク」(述語辞書)、兵書「シキートウーヘンニング」(歩兵銃器、弾薬及び射撃法)及び医学書「済生三方(サイセイサンボウ) 附医

戒(フイカイ)」「(濟生の三方法、医師の倫理付き)」の三冊を原書翻訳し、金属活字を作り、印刷発行しました。1850年代は、日本の近代活字印刷にとって、黎明期と云われていて、長崎奉行所や蕃書調所(バンショシラベシヨ)などが、金属活字による印刷技術の確立に向け、奮闘していた時期です。多摩の在野の蘭学者である芳齋達が、安政4年(1857)から安政5年(1858)に自鑄(ジチュウ)活字本を発行したことは、金属活字印刷の最先端を切り開いた快挙と云われています。安政4年



(1857) 11月3日付の秋山佐蔵から芳齋への書簡の要約ですが、芳齋の帰郷をきっかけに

青木得庵家への養子の話が進んでいる様子と秋山佐蔵から芳齋に活字鑄造の進行具合と植字がいつ始まるかを尋ねています。このことから、適塾を辞めたのが安政5年9月(1858)ですから、退塾の一年以上前から養子の話が進んでいたことが明確にわかります。玄礼が、嘉永6年(1853)に亡くなったことも芳齋を養子に迎える

要因となったと考えられますが、何故、これほどの英才を養子に迎えられたのかは、易直の奔走だけではないだろうと思います。得庵の天然痘撲滅に関する活動、その知名度、また国立谷保の本田家、日野の湯浅家、八王子の秋山家などの多摩地区の名医との親交、これが、湯浅方齋を養子として迎えられた要因と考えます。芳齋は、湯浅では「方向」の「方」を、青木では「芳しい」の「芳」を使っています。その後回春堂は、芳齋の長男純造(文久元年(1861)生まれ明治17年(1884)に東京医科大学卒業後、大学病院に勤務し明治20年(1887)帰郷し回春堂を継ぎました。堺村村会議員や東京府議会議員を務めるとともに、育英資金や特別寄付をするなど、教育にも熱心だったとのこと。



芳齋の業績を記した石碑

参考文献:「大日本地誌体系 新編武蔵国風土記稿五」 「新編武蔵風土記稿巻」 「堺村誌」「常設展示 解説 第10章 町田の民権及び多摩の書物と刷物展 解説」 「青木一族のわだち」 「続 青木家の人々」 「東北大学医学部細菌学教室100周年記念誌」

八木重吉の世界 (語り部: 保坂健次氏)

「八木重吉の詩を思い出すのはたのしい。たのしいと言っただけでは済まないような、きれいなものが心に浮かんで来る。もういつの頃だろう。大正の末か昭和のはじめ、あんないい、せつない、星のような詩人がいたと思うだけでも、がさつな気持ちがじっとりとして来る。ふっと浮かんで詩がそこの身近にみちみちている事を感じる。

私は八木重吉を個人的に知らないし、その人柄をもトピック風には記憶していない。知っているのはその詩集、「秋の瞳」と、「貧しき信徒」の中の彼だけである。三十で死んだという彼のはかない生涯から、しかしこんなに人の魂を慰



保坂健次氏

める息を吐いて居てくれたことはありがたい。詩が呼吸のようなものだという事を教えられ

相原まちづくり協議会は、11町会 自治会から推薦された理事・監査で運営されています



るのは、詩に携わる者にとって限りなく心強い。詩は大地が「霜を出す」ように詩人が出すものなのだ……(昭和10年10月)この文章は昭和11年(1936年)2月発行の「詩人時代」に高村光太郎が寄稿した文章の前半の部分です。八木重吉は明治31年2月9日(1898年)南

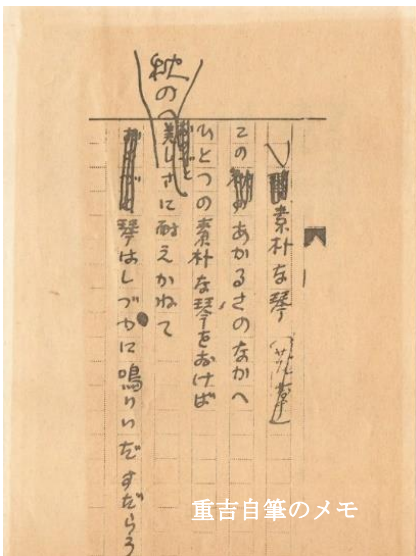
多摩郡堺村大戸4473に父八木藤三郎、母つたの次男として誕生。明治37年4月相原尋常小学校大戸分校に入学。

明治41年(1908年)《20歳》神奈川県川尻村尋常小学校へ通学。明治43年川尻小学校高等科へ進学。この時加藤武雄の教えるを受ける。大正1年神奈川県立鎌倉師範学校予科1年に入学。英語はできたが、体操と音楽は苦手だった。大正6年(1917年)鎌倉師範学校本科第一部を卒業、小学校本科正教員の免許を受ける。大正8年(1919年)《21歳》駒込基督会の富永徳磨牧師より洗礼を受ける。この年肺炎を発症し3ヶ月の入院生活を送り、そのあと自宅療養に移る。大正10年(1921年)

《23歳》東京

高等師範学校を卒業し、師範学校、中学校、高等女学校の英語科教員の免許を得る。大正11年(1922年)

《24歳》島田とみと婚約が成立する。この年11月結婚。



大正14年(1925年)《27歳》新潮社より『秋の瞳』を刊行。この詩集は恩師加藤武雄の助力で生まれました。この時期重吉はたくさんの詩を書き『詩の家』『詩神』『日本詩人』等多くの詩集に投稿しています。また手作り詩集『晩秋』『赤い花』等を発表しています。その『晩秋』の中に八木重吉記念館に歌碑として建立されている(素朴な琴)が収められています。これは大正15年(1926年)《28歳》『若草2月号』にも掲載されました。

八木重吉は昭和2年(1927年)《29歳》10月26日午前4時30分「とみ」の名を呼びながら昇天。行年30歳という短い生涯でした。

保坂氏の講演はその後「とみ」と吉野秀雄との出会いから結婚に至るまでも詳しく説明されました。



八木重吉と家族

吉野秀雄の妻「はつ」は昭和19年8月29日享年42歳でこの世をさりました。その時吉野秀雄は43歳でした。この年秀雄の幼い子供の面倒を見る為「とみ」は吉野家に入ります。その3年後昭和22年に「とみ」と吉野秀雄は再婚します。この再婚にいたる吉野秀雄の心の推移を保坂氏は吉野秀雄の詩に隠れた心の奥を感じることができると解説。非常に興味深いものでした。

生きの緒に 沁みてさやけきしろたえの 富士のいただき あな真白妙

結婚を決心した時吉野秀雄が詠んだ歌には心のもやもやが消えてすっきりした心情が表れていると締めくくりました。

吉野登美子(八木とみ)は1999年享年94歳の生涯を終えられました。吉野秀雄が生前、とみの没後は八木重吉の墓所にも埋葬してやりたいと詠んだ短歌に従い八木重吉の墓標の隣に分骨されています。

八木重吉の命日である10月26日は現在でも「茶の花忌」の呼称が付けられ多くのファンが墓所に訪れます。



相原まちづくり協議会は、11町会 自治会から推薦された理事・監査で運営されています

相原の民話 朗読 黒田 広子氏 「生き埋めにされたご両部様」



黒田広子氏

この民話は丸山に伝わるもので、あらすじは次のようなものです。その昔、丸山

にたいそう器量のよい娘がいました。その娘はあまりにも美しいので、村の若者たちは他の村の者に横取りされないよう村の掟をつくりました。その掟は決して丸山以外の男はその娘にかかわることを許さないというものでした。ところがある時、村を訪れた※六部とその娘が恋仲になったとの噂が流れました。村の男たちはその六部を捕まえ、生き埋めにし、その上に粗朶(そだ)を載せて火をつけ六部を焼き殺してしまいました。その後丸山地区では疫病が大流行したそうです。占んでもらうと、それは六部の祟りのせいだとわかりました。そこで六部の魂を鎮めるため祠をつくり供養をしました。何とか疫病は収まりましたが、その後も災難は続いたそうです。この祠は今も長福寺の東側にある壽福堂の脇にまつられています。以上があらすじですが、黒田さんの流暢な朗読で場内は聞き入りました。この物語は堺市民センター

内の図書館にある町田の民話集に掲載されています。ぜひ一度読んでみてください。

※六部 全国 66 ヲ国の霊地に奉納するために回国する僧

※ご両部 真言系の仏教家によって説かれた神道。密教の金剛界・胎蔵界両部の中に神道を組み入れ解釈しようとする神仏習合の思想。明治に入り神仏分離令によりこの思想は薄れる。

※解説(推測)

この六部殺しの民話は日本

全国にたくさん残っています。恐らく疫病が流行った時、誰彼ともなくこれは六部の祟りだ！この町にも六部を焼き殺した若者がいるからだ！と物語を作ったのではないかと思います。江戸時代、下相原村でさへ 90 軒程度の民家しかありませんでした。しかも丸山にそんな恐ろしい若者はいなかったと思います。



ご両部様



相模原協同病院移転

かねてより計画されていた相模原協同病院の移転について、11月26日高野靖悟病院長による講演会「新病院を語る」が橋本の杜のホールで開かれました。

新病院完成と移転は2020年10月、ちょうど東京



オリンピックも終わった時期になります。正確な面積等は不明ですが、相模原市緑区橋本台の職業能力開発総合大学の跡地の約半分(残りの半分は相原高校の移転先となります)をつかいます。例えば駐車場ですが約1300台が駐車できるスペースが確



完成予想図

保されるようです。病床数については現在と変わらず540床ですが、全体にゆったりとしたホテルを思わせる造りになるようです。現在は家族やお見舞で訪れた方のくつろげる場所がありませんが、新病院にはラウンジも併設されます。だんだん高度な医療機器が増える時代ですが、それも最新の機器が導入されるとのこと。正真正銘の総合病院といえる内容になるようです。

又それに伴い橋本駅からは2連結の大型バスがシ

相原まちづくり協議会は、11町会 自治会から推薦された理事・監査で運営されています

ヤトル便として運行されます。また病院の玄関までは新しい道路も計画されていて、橋本駅から約7分で行けるようになります。相原から車で行く場合はきらぼし銀行から南へ直線で行けるように

相原中央公園開園 10周年を記念

平成30年12月16日町田市立相原中央公園にて同公園開園10周年を記念し、福島から取り寄せた三春桜の苗木の鋤入れを、町田市公園緑地課、レスポアール相原、相原地区連合町内会、そして相原まちづくり協議会の各代表者にて執り行いました。三春桜独特のしだれ桜の満開が待ち遠しいですね。



三春桜の植樹

研修旅行

今回の研修旅行は3年に1度の、一泊旅行で熱海市の網代へ本会理事を含め計16名のご参加を頂きました。最近熱海駅周辺では観光客が増加しています。網代はその隣にある港街です。何か(橋本と相原)と(熱海と網代)の関係が似ていて、まちづくりの参考になるのではないかと期待し網代を選びました。宿泊した旅館『平鶴』の社長であり熱海市長川口健様と熱海市観光建設部次長立見修司様から話をお伺いすることが出来ました。観光に関わる過去から現在までの経過と、今の取り組みについて豊富な資料を基に、観光協会と連携して街のにぎわいに努力していることが感じられる有意義な研修旅行になりました。参加した方々から「美味し

なります。道路の拡幅等が完成されれば、きらぼし銀行の交差点から2km、車で5分、自転車でも15分位で行けそうです。

い料理とおおてなしに大満足でした」とのことでした。



平鶴の前で

相原シャトル丸山団地号の試験運行が半年延長されます

2018年10月1日～2019年3月31日の期間、第2回目の実証実験運行が行われていますが、12月25日の町田市地域公共交通会議で2019年9月30日までの延長がきまりました。

11月度の試験運行の実績がでましたが、全13便(上り6便、下り7便)のうち下りの16時台17時台の便は乗車率が2～3になっています。(1便当たり2名～3名の乗車)これは平均ですから、便によっては定員をオーバーしていて、乗り切れないケースが発生しています。積み残した場合、増便ではなく同じタクシーを使うため一度乗客を降ろした便が再度戻ってきて積み残した乗客を乗せることになります。ただ上り便の一部に平均1以下の便もあります。まだ改善の余地が残されているようです。10月と11月

の差では、上り下りともいなげや「まで」や「から」の乗客が増えている点です。買い物にも便利なのが浸透してきている証ではないでしょうか？

今後のスケジュール

- ・2019年1月～3月 周知・広報(周辺地域市広報、町田市ホームページ)
- ・2019年4月 実証実験運行継続
- ・2019年9月 実証実験運行終了
- ・2019年10月 アンケート調査の実施、実験結果の検証、今後の方向性についての協議

10月	11月	合計	前回の実証実験運行
1.39	1.46	1.42	1.00

1台当たりの乗車数

相原まちづくり協議会は、11町会 自治会から推薦された理事・監査で運営されています